

---

# もどきども 第四話「vs.とべないペガサス」

維川 千四号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もどきども 第四話「vs・とべないペガサス」

### 【Nコード】

N4607N

### 【作者名】

維川 千四号

### 【あらすじ】

現代活劇ファンタジー“もどき”第四弾。

今回の対戦相手は「天馬・ペガサス」。

しかし、疾駆・飛翔のペガサスが“とべない”とは、これ如何に。

**\*序\* (前書き)**

現代活劇ファンタジー“もどき”第四弾。

次なる対戦相手は「天馬」。

楽しんで書いておりますので、楽しんで読んで頂けたなら、これ幸いです。

\*序\*

それは、白い翼だった。

あらゆる穢れを知らない白。

何物にも染まることのない気高き白。

生まれる影さえも飲み込んでしまうような白。

綺麗だ。

素直に、率直に、そんな言葉が自然と出てきた。

むしろ、口にしなかったことが不思議なくらいだ。いや、もしかしたらこのときのオレは言葉という概念を忘れていたのかもしれない。

ただそれ程に。

ただそれ程に、美しい白い翼だった。

……オレのとは正反対だな。

しばらく（自分的にはかなりの時間）見蕩れた後、ふとそう思った。

やっぱり、宿したモノが違う。

ペガサス。天馬。神話の存在。

ドツ<sup>ミチル</sup>ペルゲンガーとは伝説としての格が違う。……なんて言うとおれの影は拗ねるかもしれないけど、でもそれが真実であり、事実だ。

どうしようもなく事実、オレたちはアイツに勝てなかった。

格が いや、次元が違い過ぎていた。

勝てる、なんて思ったのが間違っていた。間違い過ぎていた。だけ。

だけど、勝とう、とは今でも思っている。勝率の問題ではなく、意志の問題として。

オレは、勝たなくてはならない。

だから、別格だろうが異次元だろうが関係ない。

そして、オレだってあの頃のままではない。格や次元はともかく、レベルは上がったはずだ。

もう二度と、アイツに宿ったあの

「あのさ。あんまりジロジロ見ないでくれる？ アンタに変な気持ちになられても困るし」

その言葉のせいで、オレの決意は完全に砕け散った。それはもう、ガラスでも叩き割るような音で。

「……変な気持ちつてのは、腹の底から沸き上がるこの赤黒い感情のことか？」

少なからず劣情だったり、欲情だったり、発情だったりしてない。

そりゃ、健康的な背中だとは思っただけど。

けど、それだけだ。

あいにく、オレは結城ゆづき以外に劣情だったり、欲情だったり、発情だったりほしくない。断じて、しない。

そう堂々と宣言したいのは山々だが、それには危険な香りが漂うのでしなただけだ。なんとなく、何かを失ってしまう恐れがあるからだ。

……もう既に手遅れな気もしないでもないが。

まあ何にせよ、一瞬でもコイツのことを『綺麗』なんて思ったオレがバカだった。

つまり、バカな男代表だ。

もしかしたら日本代表も狙えるかも。

「大丈夫、確実にベスト4には入れるって。そしてアンタがバカでチビだつてことは読者全員が知ってるって」

「ようし、言いたいことは色々あるが一つだけにしといてやる」

今、赤黒い感情は真っ黒い感情に変わった。これでオレもミチルと同じカラーリングだ。影と同じダークでブラックだ。

「『オレの』『モノローグを』『読むな』」

「別に、そんなモン読んでないわよ。アンタのバカ面に書いてあんの」

「オレはそんな面した覚えはねえよ！」

「じゃあチビ面」

「そんな面はねえ！ オレより少し、少しだけ、ほんの少しデカいからって調子に乗るなよ！」

「……必死ね、アンタも。“たかが”身長のことです」

くそ、文字通り見下されてる。

やっぱりオレ、コイツ嫌いだ。

結局、白と黒は混じり合うことはないんだろう。

なんて、オレがモノローグを語っていると、何故かノツポ面をや

や赤く染めて、

「でさ、ウツハ薄原。私そろそろ服着てイイ？」

と、彼女は言った。

**\*起\*  
(前書き)**

-	-
-	-
-	-
	>
	i
	1
	3
	8
	8
	6
	1
	4
	2
	1
	<
	-
	-
	-
	-
	-
	-

\*起\*

「ねえ、アンタと生徒会長、どっちの方が×××デカイの？」

津々浦第二高校。オレの教室。昼休み。

馬淵翔子のまさかの第一声に、オレは自分の耳を疑った。

もちろん、質問の一部が聞き取れなかったからじゃない。諸事情により『×××』となっているが、実際ははつきりと三文字の単語が聞こえた。むしろ、そこしか聞こえなかったといつても過言ではない。

「あの、さ。教室で女子がそういう発言を堂々とするべきじゃねえと、オレは思うんだが……」

つーか、教室以外でもダメな気がする。

「イイじゃんか、別に。語尾が『ぽ』じゃなくて『こ』だっただけ上出来だと思ってもらわなきゃ」

「単語を限定できるような発言はするんじゃないねえ！ 『ぽ』だろうが『こ』だろうがアウトはアウトだ！」

そのせいで年齢制限になったんだぞ、このヤロウ。

「うるさいなあ、薄原は。それにこれは私じゃなくて、この世界を作った神様のせいなんだから」

「……………」  
とんだカミサマもいたもんだ。もし会えたら、斬り捌いてあげたい。

「それとも何？ ×××××って言えばイイ？ もしくは丁寧に、お

×××××って

「即アウトだ！ 三者三振でアウトだ！ 三者三様、口を揃えてアウトだ！」

「何それ？ もしかして野球のバットと×××を掛けて」

「ゴメン、頼む！ もう言わないでくれ！ これ以上、年齢制限を



厳しくしないでくれ！」

「つか、設定上オレたち十七歳なんだから。次の年齢制限は十八歳以上になるから、オレたちの登場自体が危うくなるんだから。ただでさえ今のご時世、そういうことが厳しくなってるし。」

「……はあ。アンタのために一応言っとくけどさ」

と、突然深いため息を吐き、残念そうな目でオレを見る馬淵。

「女子はこのくらいの話、普通にしてんだよ。アンタの女子理想像、壊すように悪いけど」

「な、何だと……」

結城もこんな話をしていると云うのか。

まさか。そんなバカな。

長年の相棒に裏切られた気分だ。背中を任せていたヤツに、突然後ろから刺された気分だ。

今のオレで言うならヴィアン は、ねえな。確実にねえな。

アイツなんて何一つ信用に値しない。一緒にいればいる程、信じられないヤロウだ。

むしろ、ついこの間出会ったばかりの大神さんおおがみの方が信用できる。

後遺症として未だ残るパワーとスピード、そして素直な性格（ヴィアンは一片も持ち合わせていない）は十二分に信頼できるモノだ。

現に、魚住さんういづみの件でも助けてもらったし。

「そついえば、アンタと生徒会長さ」

と、さもことのついでのように。

今、思い出したことのように。

実に些細なことを話すように。

「この間、公園で魚住先生を囲んで何してたの？」

これが、津々浦第二高校陸上部のエース・馬淵翔子との久々の会話。  
話。

今回のお話の対戦相手・とべないペガサスとの出会い。

だけど、このときのオレはお約束通り、まだ何も知らない。

\* 承 \*

「なあ、馬淵まいづちって覚えてる？」

オレはトイレから帰ってきた結城ゆづきに早速そう訊いてみると、

「うん、翔子しょうこちゃんでしょ」

すぐさま当然のように答えが返ってきた。

「どうしたの？ 急に翔子ちゃんの話なんて」

そう言いながら、食べかけの弁当に箸をつけ直す結城。

「あ、いや、今さっきまで馬淵が来ててさ。アイツどんなヤツだったかなあ、と思って」

今からほんの少し前、馬淵は“言いたいこと”を言うと、結城と入れ違うように教室から出ていった。

そう、まるでオレが一人になるのを見計らったように。

「えー、中三のとき私たちと同じクラスだったでしょー。覚えてないのー？」

私は智流ちりゅうくんの将来がホントに心配だよ、と相変わらずの母親みたいな一言を付け足す。もちろん、こめかみを押さえる癖を少しオバーに見せつけることも忘れない。

「いや、覚えてないっつーか、そんなに会話したこともないからさ。ほら、ウチの中学、男子と女子の関係ビミョーだったし」

まあいわゆる『女子と仲良く話すなんて男子の恥だ』的なヤツ。

今改めて考えると、くだらない思考回路だけど。ホント何だったんだろな、アレ？

ちなみに当時のオレは結城と幼なじみとして仲良くしてたので、男子的には『恥』サイドの人間だった。

いや、別にイジメられてたとかじゃないけど。……ホントだよ？

「翔子ちゃんはずごいんだよ。中学のときもそうだったけど、陸上部での走り高跳びの成績が。今なんか二年生なのにエースって呼ば

れてるくらいなんだから」

と、自慢の娘を紹介するように結城は話す。

ホント、いよいよ母親みたいだ。

それも、みんなの。

……何だろう、なんとなく悔しくというか、ムカつくというか、モヤモヤするというか。

別に、マザコン属性はないはずんだけどなあ、オレ。

「でもね、これは噂なんだけど、今スランプ中って話。記録が伸び悩んでるところか落ちてく一方で、最近は練習にも参加してないんだって。大変だよねえ、大会も近いのに」

「へえ、『噂』で、ね」

噂。伝説。

それは“ヤツら”の正体であり、本体だ。

バカにすれば痛い目に遭う。痛くて、痛くて、痛い目に。

『痛みを伴わない教訓には意義がない』なんて聞いたことがあるけど、それならオレは“死ぬ”程の意義を知っている。

裁判なら「意義あり！」と叫べるくらいだ。……いや、字違うけど。

「で、その翔子ちゃんが何しに来たの？」

そう言つて、キレイなタコさんウイナーの頭部を口にする結城。ちなみに余談だが、ウチの母さんは以前、突然イカさんウイナーなるものに挑戦したことがある。無論、不器用な母さんによる無謀な作品はUMAさんウイナーになつたのだが。

以上、余談終わり。

つーか、オレの言葉選び終わり。

「まあ、ただの世間話だよ。『久しぶり元気だったー？』的な」  
嘘。

オレの選んだ一番無難な嘘。

真っ赤で、真っ黒な嘘。

そんな平和的な話は一切してない。終始危険な

地雷原みたい

な話だった。

智流ちりゅう薄原うすはらのすべれない話。一步踏み間違えればアウトというスリリングな展開。

その前半は年齢制限的な地雷。

そして、後半はオレ個人に向けた地雷。とても真昼の教室で行われるとは思えない、一種の脅し。

「ふうん、そうなんだ。そんな話もできるんだ」

智流くんでも。

「ちょい待て。今、聞き捨てならねえセリフが聞こえたぞ」

「え？ そう？ きつと空耳だよ。スカイヤヤーだよ」

「何だ、そのウサギの品種みたいなのは？」

耳で空飛ぶのか、そのウサギ？

そいつは確実に、耳で空飛ぶ象と一緒に『夢の国』で大活躍だな。

「……そういえばさ、このやりとりも久々だよね？」

と、話の方向転換をする結城。

なかなかの強引さだが、あえてここで追及することはしない。正直、馬淵の話に戻るのはオレにも良くない展開だ。

何せ、話の内容を一番聞かれてはならないのは、目の前の結城だ。現状、オレは結城を人質に取られているようなモンだ。

まあ、人質本人にも脅した当人にも、その意識はないんだけどな。

「なんかさあ、最近私『昼休みだけに登場する、ご飯ばかり食べてる女』ってイメージが定着しそうで嫌なんだよねえ」

この辺りで本格的にイメチェンしといた方がイイのかなあ、なんて結城は小首を傾げる。

「やめるんだ、結城！ そのイメチェンは危険な方向に走る可能性があるがある！」

この世界を作っているのは、最低最悪・低俗卑猥なカミサマなんだ。年齢制限の掛かる話が大好物なんだぞ。

『×××』とか言わされるんだぞ。

オレはそんな結城、見たくない。

「だから、イメチェンなんてやめるんだ！　今のままでいい！　つか、今のままがいい！」

オレの女子の理想像は塵になるまで粉碎されてもいいから、お前の理想像だけは壊れないでくれ。

「ま、まあ、智流くんがそこまで言うなら……」

オレの鬼気迫る説得と口から飛び出すご飯粒に怯み、結城は会話を終了させる。

その際、どことなく頬が赤くなっていた気もするが、まあ見間違いだらう。スカイイヤーならぬスカイアイってヤツだ。

まあ何にせよ、これで結城のミロのヴィーナスさながらの純白像は守られた。

今日も世界は平和だ。

しかし、オレのこの努力を知る者はいない。

だが、それでいい。

正義のヒーローは、いつも人知れず戦うつてのが『お約束』だ。

助けた相手に気付かれなくても、満足なんだ。

結城は、何も知る必要はない。

結城は、今のままでいい。

オレは、今のままの関係がいい。

だからオレは　。

\*承・続\*

放課後。津々浦第二高校。第一体育倉庫。

「爽やかに『ゴメン。待った？』くらい言ったらどうかと、私は思うんだけど」

オレがその大きな扉を閉めるなり、一人待っていた馬淵まふちはそんなことを言った。

「何でオレがそんなこと言わなきゃならねえんだよ  
結城むすぎにだって言ったことねえぞ、そんなセリフ。」

「言いなよ。いいから」

「じゃないと“あのこと”学校中に言いふらす。」

「……………」  
「脅おそいだ。」

明白過ぎるほど 明るく白い、めまいがしてきそうなくらいシンプルシンプルな、脅おそいだ。

もしこれが二時間サスペンスなら、間違いなくオレは隙を見て馬淵まふちを殺す展開だ。

しかし、オレはこんなことで人殺しをするようなキレやすい現代の若者ではない。良かったな馬淵、命拾まきいしたぞ。

だがしかし、そんな脅おそしに簡単に屈するオレでもない。男の中の男を甘く見てもらっては困る。

だからオレは堂々と、  
「……………ご、ゴメン。……………待った？」  
言い切った。

人生最高の切れ味で、言い切った。

かの有名な斬鉄剣にも匹敵するような切れ味だ。  
しかし馬淵は、

「ダメ。やり直し。もっと爽やかに言っつて」

無情にも、まさかのテイク2を要求してきた。

かの有名な斬鉄剣にも斬れなかったコンニャクを斬れと言ってきた。

「もっと、こう……ミントタブレット食べた後に飲む水みたいな爽やかさで言って」

「……………」

ものすごくスーサーする爽やかさだな、それは。

しかし、スーサーだろうがハーハーだろうがヒーヒーだろうが、そんなことオレには出来ない。出来ないっいたら出来ない。

だからオレは威風堂々と、

「ゴメン。待った？」

言い切った。

ついにオレの斬鉄剣はコンニャクを斬り裂いた。

ついでにオレの大事な何かも斬り裂いた気もするが、まあ今は考えないことにしよう。

「つか、何故だろう？ スーサーする言葉を言ったのに、オレの全身が熱いのは。

すると、そんな疑問を抱くオレに、

「うわっ。ホントに言ったよ、この男」

馬淵は極低温の眼差しを向けていた。

一見すれば軽蔑しているようにも見える行為だが、察しの良いオレにはその真意が手に取るように分かる。

なるほど。お前はそうやってオレの火照った身体を冷まそうとしてくれるんだな。

ありがとう。ああ、ありがとう。

だからオレは、今思っている言葉をありのまま、

「テメエが言えって言ったんじゃないやねえかよ！」

怒鳴った。

まあ要するに、我慢の限界だった。

「……………うるさいなあ。私が“言いたいこと”我慢してるんだから、



「アンタは“言いたくないこと”我慢しなさいよ」

と、耳を塞いでいた両手を離すと、再びの脅しを繰り出す馬淵。  
なるほど。オレには怒鳴る権利もないんだな。

「ていうか、そんなキレやすいなんてカルシウム不足なんじゃない？  
だから身長も伸びないのよ」

と、馬淵。

しかし、ここで再び怒鳴るようなオレではない。何度も言うようだが、甘く見てもらっては困る。

何故かと問われれば、理由は簡単。

オレは、器“も”大きい男だからだ。

断じて、権利を奪われたから怒鳴れないわけではない。

力のこもる握り拳も、馬淵に殴り掛かるためなんかではない。第一、現代のサムライを自称するオレが、女子にそんなことするはずがない。

第四話から読み始めた方には、自信を持ってオレはそう力説できる。斬鉄剣の如く言い切れる。

……と、そんなオレの話はイイとして。

脅されている立場として、とりあえず馬淵の話を 要求を、訊くとしてしよう。

「で、口止めにオレは何をすればイイんだ？」

「んー、そうだなあ……」

そう言っただけで見定めるように、見極めるように、見透かすようにオレの全身を上下隈なく見る。

そして舐め回すように眺めていた視線を、どこか一点に固定すると、

「結局アンタと生徒会長って、どっちが『攻め』でどっちが『受け』なの？」

と、訊いてきた。

「……何の話だよ、それ？」

「っーか、どこ見てんだよ、お前？」

と、口にしかかったが、すぐにそれは中止した。何せコイツは平然と『×××』と言う女だ。だからこれ以上、この世界の平和を乱させるわけにはいかない。正義のヒーローの戦いは、いつだって孤独なのだ。

……って、もしかして『攻め』と『受け』ってそういうことか？  
オレと大神さんの戦いも、コイツは見ていたってのか？

くそつ、これはいよいよ誤魔化しようも  
「何って。アンタと生徒会長がBLだって噂、知らないの？」  
陸女なんてその噂で大盛り上がりよ、と馬淵。

……はっは。はっはっはっは。

何だ、そんなことか。心配して損したぜ。

てつきりオレは、あの狼男との戦いをコイツに見られていたんだ  
と思っちまったZE。

まったくもう、オレってばうつかりさん

コイツが言ってるのは、ただのオレと大神さんのBL

「……って、何だそりゃ!？」  
ツッコんだ。

モノローグも含めると、ノリツッコミだ。

「そんな噂、どこから発生したんだよ!？」

「どこって……知らないけど、とりあえず学校中の噂だよ」

「が、学校中……だと」  
そんなバカな。

そんな噂、事実無根。根も葉もなければ、茎も花もない話だ。

「でもさあ『時かめ種は生えぬ』とも言っよ?」

「……」  
くそ、コイツはどうやってオレを窮地に追い込みたいんだな。

……まあ、脅されてる今こそ、窮地なんだけど。

「まあ、そんな話は後でイイとして」

……後でまたするのかよ、その話。

「私の要求を、言っわね」

「…………おう」

何だ？ 金か？ あいにく金ならねえぞ。

オレの月の小遣いなんてたかが知れてるし。毎年のお年玉も、智流が大人になったら渡すからね、と意味深な笑顔でほとんど母さんに徴収されてるから出せねえぞ。

「もう一度訊くけど、あのとき、あの公園でアンタたちは一体何してたの？」

「……………答えたくない」

魚住さんつおずみを救うべく、夢の中で戦ってました……………なんて言えるわけがない。

そんなことを言えば、一発でオレは電波さんか、ファンキーな脳みその持ち主扱いされるに違いない。

それに何より、それを、結城に知られる可能性を作るわけにはいかない。

結城と馬淵（一応オレも）は中学からの知り合いだ。結城のあの話し方だと、仲が悪い気配もない。

『一度でも“僕ら”に関わると、どうしたって引かれやすくないや、惹かれやすくなる』

馬淵が冗談でも『この話』を結城にしてみる。それがキツカケで結城が『あのこと』を思い出してみる。

その先にあるのは 再発。

サキュバスの 再来。

『特にサキュバスは再発しやすいから、チルチルくんは真実ちゃんをしつかりと傍で見張っておくんだよ』

別に、吸血鬼“もどき”の言いつけを守ってるわけじゃない。オレが、オレのために、オレ自身の意思で、結城の傍にいるんだ。

オレの願いは 結城が結城であることだ。

オレはこの願いを“ヤツら”に頼ることなく、叶えてみせる。

だから、オレは馬淵の質問に答えたくない 答えるわけには、

いかない。

すると、口を開こうとしないオレの態度を見て、

「あっそ。じゃあイイわ」

と、馬淵。しかし続けて、

「それじゃ、質問の方向性を変える」

オレの目を、鋭利な視線で貫いてきた。

「確かアンタんち神社だったよね？ 夢守神社ゆめもりだったっけ？ それって何？ 悪魔とか憑き物っていうの？ そういうモンを抜ったりとかも出来るの？ 訳の分からないことを、解決出来たりするわけ？」

疑問符の連打。

そして、その全てが“ヤツら”につながる質問。

電波さんでも、ファンキーな脳みその持ち主でもなければ、到底同級生に訊くことのないだろう質問。

「……オレは聖徳太子じゃねえんだ。質問は一つずつにしてくれ」とりあえず冷静に皮肉を言ってみる。しかし動揺は全くといってイイほど収まらず、むしろ揺れが増すばかりだ。

全身が、熱い。しかし、これは恥ずかしさから来るモノじゃない。今のオレでも、それだけは分かる。

一体、馬淵翔子つばしは。

何を知ってる？

何まで知ってる？

何故 知ってる？

「じゃあ、質問を一つに絞るわ」

そう言っつて、馬淵はオレの目から視線を外す。いや、少しだけ冷静さを取り戻して見れば、その場でくるりと身体を百八十度回転させていた。

そして、その背中越しに、皮肉っぽくこう言った。

「もし私が、背中から翼が生えたって言ったら、アンタ笑う？」



\* 転 \*

「ペガサス」

例によって例の如く、ヴィアンは開口一番そう言った。そして続けて、

「何度も言うようだけど、僕は専門家じゃないから正確な情報じゃないかもしれないけど、それは承知しててね」

と、お約束の前置き。

「ペガサス、天馬。その存在は諸説あるから、ここで僕が言及することは控えさせてもらっただけど、とりあえず確かに言えることは、ギリシア神話とローマ神話に登場する、天駆ける翼を持つ馬。それがペガサス」

「それが、馬<sup>ま</sup>淵<sup>ぶち</sup>に宿ったモノなのか？」

「まあ、十中八九の九分九厘そうだと思うよ」

僕が実際に見たわけじゃないから、言い切れはしないけどね。と、肩を竦めるヴィアン。

「別に俺も見ただけじゃねえよ。話を聞いたただけだ」

結局、オレは馬淵から“症状”だけを聞いて、家に帰って来た。そしていつも通り晩飯を食べ、いつも通りオレの部屋でヴィアンに報告。……正直、これが習慣化しているのもどうかと思うが。

「できれば翼を見てきてもらえれば、僕も断言できたかも知れないんだけど……まあ、僕以上に専門家じゃないチルチルくん<sup>チルチルくん</sup>にそれを求めるのは酷な話か」

それに、人気のない体育倉庫で女性に上を脱いでもらっなんて、若さ故の暴走を招きそうだしね、とニヤつくエロオヤジ いや、ヴィアン。

「でも、その翔子<sup>しょうこ</sup>ちゃんは『白い翼が背中から生えた』って確かに

言ったんだろう？　なら、ペガサスだと思って間違いないよ」

「……あんまり言いたくねえんだけど、宿ったのが『天使』って可能性はないのか？」

馬淵のあの性格からは到底似つかわしくないけど。似せようにも似てないけど。でも、白い翼と聞いてオレが最初に想像したのが天使だった。

人の背に翼。その姿は天使そのもののような気がした。すると、いつも通りのヘラヘラとした笑みで、

「ムリムリムリ。天使なんてそんな存在、宿そうとしたって宿せないよ」

ヴィアンは大袈裟に首を横に振った。

「天使つてのはご存知の通り神の使い。神聖なる存在。穢れた人間にとつては不可侵な聖域だよ。それとも何かい？　翔子ちゃんは純真無垢な女の子だったりするのかい？」

「……大丈夫だ。馬淵に宿ったのは間違いなくペガサスだ」  
純真無垢な女の子は「×××」なんて絶対言わない。

そんな穢れた馬淵にはペガサスがお似合い

「いや待てよ。何でそれでペガサスなんだよ？　ペガサスだって天使と同じく神聖な存在なんじゃねえのか？」

神話に出てくるくらいだ。ペガサスも不可侵な聖域なんじゃないのか？

「まあそれはそうなんだけど、言ってしまうえば格が違う。天使とペガサスでは神聖さのレベルが違う。それがどんな意味を持つかは、身をもって経験したチルチルくんなら説明しなくてもイイだろう？」

「……ああ」

そう頷いて、オレは視線を落とす。そこには確かに自分の左腕が神聖なる炎に受けた傷なんて一つもない腕が、しっかりとつながつていた。

もし。

もし、あの戦いが精神世界あちらいがわじゃなかったら。

もし、オレに吸血鬼“もどき”の血が流れていなかったら。  
もし、あそこでヴィアンがオレを無理矢理連れ帰ってなかったら。  
オレは腕どころでなく、命を失っていただろう。

……………  
そういえば、あのときの礼、まだ言ってるねえな。

そう思っただけ視線を上げ、目の前の男を見る。あとき、自分の力不足を八つ当たりしてしまった相手を。

何かを言おうとしてオレの唇が微かに動いた。しかし次の瞬間、それに何より、とヴィアンは言葉を続けた。

「速く走れる馬に、高く飛べる翼。走り高跳びの選手である翔子ちゃんには、ぴったりの願いだろう？」

「……まあ、確かに」

結城の話じゃ、最近は記録が伸び悩んでいるらしいし。しかも大会が間近なら、何が何でも頼りたい相手だろう、ペガサスは。

「……って、ちょっと待てよ。それじゃ馬淵だけじゃなく、他にもペガサスを宿したヤツがいてもおかしくないじゃねえか？ 別にウチの高校の走り高跳びの選手は、馬淵だけじゃないんだ」

するとヴィアンは鋭い牙を見せ、  
「チルチルくんもなかなか分かってきたねえ」

と、ニヤリと笑った。

「確かに君の言う通り、それだけじゃペガサスは宿らない。その程度の願いで“僕ら”は宿っちゃいけない。だから、翔子ちゃんの願いはその程度じゃないんだと、僕は思うよ」

「どういう意味だよ？」

「ペガサスに対する願いは『速く走りたい』や『高く飛びたい』ってのがポピュラーで、まあ翔子ちゃんの場合はその両方なんだろうけど、おそらくその願いの重みが 想いの重みが違うんだよ」

「想いの、重み？」

一瞬、つまらないダジャレかとも思ったが、言った本人からはそんな雰囲気は一切なかった。



「ああ。記録の伸び悩み、大会が近い、エースと言う重圧……なんて、正直“僕ら”からすれば大した思いじゃないんだ。そこから生まれるのは、軽薄な願いでしかない。そよ風で吹き飛んでしまうような、軽くて薄っぺらなモノさ」

それこそ、羽根のようにね。

「だから、翔子ちゃんの願いには裏があるはずなんだ。いや、この場合は『根がある』と言ったほうがいいかな」

「何だよ、それ？」

「願いの根底にある思い、ってことさ。長い時間を掛けて、ゆっくりとじっくりとしっかりと積み重ねられた思い。それは強くて重い、“僕ら”を宿せるだけの願いとなる」

チルチルくんも身に覚えがある話だろう、とヴィアンがオレに問い掛ける。

「……………」

それは、実に身に覚えのある話だ。肉体的にも、経験的にも分かりやすい話だ。

結城は、サキユバスに。大神おおがみさんは、狼男に。魚住うおずみさんは、人魚に。オレは、ドツミチルペルゲンガーに。

長い長い時間を掛けて、強く強く願った。

『時かぬ種は生えぬ』　　だけど、その種がすぐさま花を咲かせるわけじゃない。

種から根が出て、芽が出て、茎が伸び、葉が増え、ようやく花が咲く。

日の光のように熱く、雨のように悲しく、降り注ぎ続けた願いが“ヤツら”を生み出す。

「だからね、君は翔子ちゃんの根を知る必要がある。いくら格が違えどペガサスも神聖な存在で、強敵には違いない。そんな相手の力の源を知っておいて、得することはあっても損することはないはずさ」

まあ女の子の秘密なんて、他の意味でも無敵アイテムだけどね、

とニヤつくヴィアン　いや、エロオヤジ。

もちろん、そんなのに付き合ってる暇はないし、付き合ってるようなオレではない。

「だけど秘密なんて、どうやって知るんだよ？　自分の秘密をベラベラ喋るヤツなんていねえし、特に馬淵は意地でも言わないタイプだぞ」

解決のためにと、翼を見せてくれるよう頼んだけど、それすら拒否されたんだ。そんなことを簡単に教えてもらえるはずがない。

すると、一つ呆れたようにため息を吐いて、

「ホント、チルチルくんはお子様だねえ」

と、ヴィアンは残念な目でオレを見た。

「異性に対するアプローチってのは、ストレートに限ったモノじゃない。時には変化球も大事なのさ。例えば　相手の友達から情報を仕入れる、とかね」

「友達って……アイツの交友関係なんて全く知らねえぞ」

「やだなあ、いるじゃないか一人。翔子ちゃんを昔から知っていて、仲が良くて、君からの突然の電話を迷惑どころか喜んでくれる人物が」

「……………」

なるほど。確かに一人いるな、信頼できる情報源が。

だからケータイを手に取り、手慣れた動作で見慣れた番号を表示させる。そしてそのまま電話を掛けようとした指を、ああそうだとヴィアンが止めた。

「ペガサスとの決戦は今夜なんでしょ？　だったら、ラブラブトークは程々にね」

「うるせえ、黙れ、殺す　略して黙殺するぞ」

「無視されるの!？」

それはそれでキツいなあ、と呟くヴィアンを尻目に、今度こそオレは電話を掛けた。

ベルが鳴る。まだ相手は出ない。

そんな様子を見て、ところでき、とヴィアン。

「翔子ちゃんとの待ち合わせは、どこだっけ？」

「第一体育倉庫。昼間と同じだ」

「へえ、夜の体育倉庫か……。何とも響きがいやらしいねえ」

と、ニヤつくエロオヤジ　いや、エロオヤジを、オレは宣言通り黙殺した。

\* 結 \*

月が大きく傾いた頃。津々浦第二高校。校門前。

「アンタ一人で来てって言ったはずなんだけど？」

明らかに不愉快そうな声と顔で、上下ジャージ姿の馬淵まぶちはそう言った。

「いや、あの、まあ、気にすんな。コイツは……保険みたいなモンだから」

部屋での作戦会議後、オレとヴィアンは待ち合わせの時間より一時間早く家を出た。

その理由は二つ。

一つはヴィアンが認識阻害って術式（毎度の如くの回りくどい説明で理論はよく分からなかったが、使用には条件が色々あるらしい）を学校に掛ける準備のため。

もう一つは馬淵との約束を守るため。オレー一人で来ないと、問題の翼を見せないというモノを。

だから早めに術式を準備して、念のためヴィアンにはその辺に隠れてもらおうと思っていたのに。

のに　オレとヴィアンは馬淵に会ってしまった。それもガッツリと。

というか、馬淵はすでに校門前で待っていた。「ゴメン。待った？」なんて爽やかに言わなくてもいい時間に。

「保険？」

と、眉をひそめながら、オレとヴィアンの顔を交互に　　というより上下に見比べる馬淵。

もちろん、その高低差が生まれるのはヴィアンが大き過ぎるせいだということ言うまでもない。

「あれだ。オレが相談してみるって言った専門家　　みたいなヤ

ツがコイツのことだ。大丈夫。万が一の時のために連れてきただけで、いざという時以外は学校の外で待機させるから安心しろ」

「そうそう、僕のことは全く気にしないで。ご主人様が死んでも待ち続ける忠犬八子公の如く、しっかりとお留守番しとくから」

と、いつも通りのヘラヘラとした笑顔のヴィアンが言う。そして、  
「後は若いお二人でどうぞごゆっくり」

どこかで聞いたことのあるような台詞を残し、緊張感なく手を振りながら立ち去っていった。

「……………」

その姿を、馬淵は一切見ていなかった。

ただただ、オレの顔を見ていた。それもガン見。つーか、普通に睨みつけていた。

「ま、まあとりあえず中入ろうぜ。いつ誰が通り掛かるか分からないし、いつまでもこんなところに突っ立ってても話進まねしさ」

と、少し早口で言ってみると、

「……………」

無言のまま、頷くこともなく歩き出す馬淵。

うわー、確実に怒ってらっしゃる。面倒なことになったな、と思  
いながら気乗りしないがオレもその後ろに続く。

つーか、コイツに対してオレはずっと劣勢な気がする。脅され、怒られ、散々だ。

ちなみに、こんな田舎の学校には防犯意識など皆無なので、校門は開きっぱなしだし、センサーみたいなものがあるはずもない。

つまりヴィアンの術式が完成すれば、中で何が起ころうと誰も気づくことはない。いや、気づくことができない。認識障害の術とは、そういうものらしい。

だから、たとえ人が死んだとしても、誰も気づかない。

誰にも気づかれずに 殺される。

「あの外人さ」

唐突に。

校舎の横を通り過ぎ、グラウンドの中ほどまで歩き進めた時。足を止めることも、オレの方を振り返ることなく馬淵が言った。

「ホントに信用してイイの？ ホントに中に入って来ないの？」

「……まあ一応、信用して大丈夫だ。胡散臭くて、話が無駄に長くて、身長も無駄にデカくて、意味不明発言多数のヘラヘラとしたヤツだけど、悪いヤツじゃねえから」

性格は悪いヤツだけど、そこは一応伏せておこう。話がこじれる気がする。

「それに、もし何かあったらオレが責任取るから安心してくれ」

と、オレは『津々浦第二高校・女子陸上部』と書かれた背中に見せてみた。

ホントに何かあった時、一体オレがどんな責任を取れるかは不明だが、ヴィアンが無意味に約束を破ることはないだろう。

……別に、アイツを信用してるわけじゃねえけど。

すると、その背中から、

「ふうん。ま、アンタがそこまで言うなら信用しとくわ」

実にあっさりとした言葉が返ってきた。

正直、そこまでと言えるほど何か言ったつもりはないし、あんな“もどき”ヤロウを簡単に信用するのもどうかと思うが、それじゃ話が進まないでオレとしてはありがたい。

そんなことじゃ、ここまで来た意味がない。

グラウンドの隅。第一体育倉庫。本来の待ち合わせ場所。

馬淵がポケットから取り出した鍵で、スライド式のその大きな扉を手慣れた手つきで開く。そして、一度周囲を確認してから中へ入った。

オレも一応、周囲を見る。見回す。見渡す。見通す。

もちろん、人の姿はどこにもない。こういうところは田舎で良かったな。そう思いながら、オレも馬淵に続いて中へと入る。

「……狭いな」

馬淵が倉庫の電気を点ける。すると放課後に来た時とは違い、そ

ここにはぎつちりと体育用具が並んでいた。唯一入り口付近には何も置かれていない状態。おそらくあの時は使われていたモノが、収納されたんだろう。

「仕方ないでしょ。それとも、これからアンタの部屋行く？」

私は一向に構わないけど、と鼻で笑う馬淵。

放課後、オレたちが再びここで会うことにした理由は『背中を翼を見る』から。つまり、馬淵に服を脱いでもらうからだ。

もちろん、そんなことを野外でするわけにはいかないから、どこか誰もいない室内を見つける必要があった。

そして田舎の高校生が一番に思い付くそれは、互いの部屋。しかし、両者とも『家族がいるから』という理由で即NG。

だから、夜の体育倉庫への不法侵入という現状に落ち着くしかなかった。まあ、陸女のエースということで馬淵がスペアの鍵を持っていたし、それにグラウンドという“もしも”の際に便利なモノも付いているから悪い環境ではない。

「いや、ここでイイ。フーか、ここがイイ」

こんな時間に飯の飯にも女子を連れて帰ったら、家族 特に姉ちゃんに何て言われるか分かったもんじゃない。

「あつそ。それじゃ、少し後ろ向いてくれる？」

「後ろ？」

「上、脱ぐから」

と、自分のジャージを指差す馬淵。

「それとも何？ アンタは人の脱衣シーン見て喜ぶタイプなわけ？」

「オレにそんな趣味はねえよ」

「そうよね。アンタは見られて喜ぶタイプだもんね」

「そんな趣味もねえよ！」

それなら見る方がイイよ！

とは、口が裂けても言わないし、言えないけどな！

「じゃあ、さつさと後ろ向いてくれる？ ていうか、脱ぐんだから扉閉めてくれる？ ホント気が利かないわね」

「気が利かなくて悪かったな」

そう言っただけは、その場で反転し、馬淵に背を向けるカタチで扉を閉める。そして言う通りに、そのままの体勢で立ち止まった。

それにも関わらず、背後から、

「そんなんだからモテないのよ、アンタ」

追撃のダメ出し。

「うるせえな。別にモテたいなんて思っただけよ」

「モテない男はみんな、そうやって言い訳するのよ」

「……………」

何だろ。全ての退路を断られた気分だ。いや、別にモテたいなんてホントに思っただけだけど、ここで何か言っても言い訳になるよな気がする。

と、言い返せなくなったことで、室内が静かになったことで、

オレは気づいた。

フアスナーを下げる音に。

もちろんその音源は、後ろにいる馬淵のジャージからだろう。

続いて、布が擦れる音。

それがやけに大きく、オレの耳に届いた。自分の心音がうるさいにも関わらず、はつきりくつきりと。

あれ？もしかしてオレ、緊張してる？

いやいやいや。ないって、それはないって。相手は『×××』とか平気で言う女子だぞ。そんな女子が、二人きりの夜の体育倉庫で、服を脱いでいるだけじゃないか。緊張する要素なんか、一切ないじゃないですか。

まったく……ヴィアンが変なことを言うから、絶対にありえないことを考えて

「もうこっち向いてイイよ」

との言葉に、オレの思考は全て停止した。ついでに一瞬、心臓も止まった気がする。

「……って言っただけ、私が全裸だったらウケる？」



「……、……ウケねえよ。本気で笑えねえ」

今のフェイントも、な。心臓に悪いわ。

「何だ、つまんない。つまんない男。だからアンタはモテないのよ」

「それでウケるのがモテる男なら、オレはモテたくない」

「それなら問題ないわ。アンタは一生モテないってキャラ設定だから」

「その設定資料、今すぐ持ってこい！」

微塵になるまで斬り刻んでやるわ！

「で、話を戻すけど、ホントにもうこっち向いてイイよ」

「……全裸じゃねえだろうな？」

「私に露出狂のキャラ設定はないわよ」

肌寒いから早くしてくれる、と馬淵。

「お、おう」

と、オレは返事をした。

一応、するにはしてみたが、改めて考えると何この状況？

振り向いて、見る、という決定権は全てオレにあるというのに、

試されているような気がするのは何故だ？ 気のせいか？ いや、

違う。オレは間違いなく試されている。……なるほど。つまりこれ

も一種のフェイントだな。全裸の話をしておいて、オレがすぐに振

り向けるかどうかを試しているんだな。上等だ。上等じゃねえか、

馬淵。男子の底力、見せてやろうじゃねえか！

と、オレは勇ましく、しかし慎重さを忘れずゆっくりと、身体を  
反転させた。もちろん、まさかの事態に備えて視線を下げておくこ  
とも忘れない。

靴だ。

使い込まれたスニーカー。メーカー物のイイヤつだ。

その踵が見える。とりあえず全裸ではないようだ。

つか、踵が見えるってことは、今度は馬淵が後ろ向きってこと  
か。

そう分かれると 顔を合わせずに済むと分かれると、何となく安心

して視線を徐々に上へと移動させた。

ジャージの下も、馬淵はちゃんと穿いていた。これで靴以外全裸という高難易度露出テクを駆使していないことも判明。

さらに視線を上げてみると、当然ながら腰があった。アスリートみたいに引き締まった、くびれた細く白い腰。

それが、オレの目に映った。つまり、宣言通り馬淵はジャージの上は着ていない。全裸じゃないが、半裸であることが確定した。

意を決する。これより上は、二つの意味で聖域だ。だが、ここで引き下がるなんて男じゃない（断じてエロい意味はない）。

一つ深呼吸してから、オレは馬淵の背中に視線を移した。

ブラは 着けていた。爽やかな水色の、スポーツブラって種類のヤツだろう。

だけどそんなモノ、オレの目にはほとんど映っていないかった。オレの意識は、その上 肩甲骨の辺りから生えている“それ”に、全て奪われていた。

それは、白い翼だった。

あらゆる穢れを知らない白。

何物にも染まることのない気高き白。

生まれる影さえも飲み込んでしまうような白。

綺麗だ。

素直に、率直に、そんな言葉が自然と出てきた。

むしろ、口にしなかったことが不思議なくらいだ。いや、もしかしたらこのときのオレは言葉という概念を忘れていたのかもしれない。

ただそれ程に。

ただそれ程に、美しい白い翼だった。

……オレのとは正反対だな。

しばらく（自分的にはかなりの時間）見蕩れた後、ふとそう思っ

た。

やっぱり、宿したモノが違う。

ペガサス。天馬。神話の存在。

ドッペルゲンガーとは伝説としての格が違う。……なんて言うとおれの影は拗ねるかもしれないけど、でもそれが真実であり、事実だ。

どうしようもなく事実、オレたちはアイツに勝てなかった。

格が いや、次元が違い過ぎていた。

勝てる、なんて思ったのが間違っていた。間違い過ぎていた。

だけ。

だけど、勝とう、とは今でも思っている。勝率の問題ではなく、意志の問題として。

オレは、勝たなくてはならない。

だから、別格だろうが異次元だろうが関係ない。

そして、オレだってあの頃のままではない。格や次元はともかく、レベルは上がったはずだ。

もう二度と、アイツに宿ったあの

「あのさ。あんまりジロジロ見ないでくれる？ アンタに変な気持ちになられても困るし」

その言葉のせいで、オレの決意は完全に砕け散った。それはもう、ガラスでも叩き割るような音で。

「……変な気持ちってのは、腹の底から沸き上がるこの赤黒い感情のことか？」

少なからず劣情だったり、欲情だったり、発情だったりしてない。

そりゃ、健康的な背中だとは思ってたけど。

けど、それだけだ。

あいにく、オレは結城以外に劣情だったり、欲情だったり、発情だったりしない。断じて、しない。

そう堂々と宣言したいのは山々だが、それには危険な香りが漂う

のでしないだけだ。なんとなく、何かを失ってしまう恐れがあるからだ。

……もう既に手遅れな気もしないでもないが。

まあ何にせよ、一瞬でもコイツのことを『綺麗』なんて思ったオレがバカだった。

つまり、バカな男代表だ。

もしかしたら日本代表も狙えるかも。

「大丈夫、確実にベスト4には入れるって。そしてアンタがバカでチビだつてことは読者全員が知ってるって」

「ようし、言いたいことは色々あるが一つだけにしといてやる」

今、赤黒い感情は真っ黒い感情に変わった。これでオレもミチルと同じカラーリングだ。影と同じダークでブラックだ。

「『オレの』『モノローグを』『読むな』」

「別に、そんなモン読んでないわよ。アンタのバカ面に書いてあんの」

「オレはそんな面した覚えはねえよ!」

「じゃあチビ面」

「そんな面はねえ! オレより少し、少しだけ、ほんの少しデカイからって調子に乗るなよ!」

「……必死ね、アンタも。“たかが”身長のことです」

「……………」

くそ、文字通り見下されてる。

やっぱりオレ、コイツ嫌いだ。

結局、白と黒は混じり合うことはないんだろう。

なんて、オレがモノローグを語っていると、何故かノツポ面をや赤く染めて、

「でさ、<sup>うす</sup>薄原。私そろそろ服着てイイ?」

と、彼女は言った。

「結構肌寒いんですけど」

「おう、悪い。とりあえず着てくれ」

そう言うと、オレに背中を向けたまま、馬淵は手に持っていたジャージに右腕を通し始めた。どうやら下着の上に直でジャージを着ていたみたいだ。多分、すぐに翼を見せられるように。

「で、どうすればこの翼は消えるわけ？」

右腕を通し終わり、次は左　と移ろうとした馬淵の動きが止まった。ジャージが翼に引つ掛かって、思うように動けなくなったからだ。

「ああもう、邪魔くさい。ホント意味分かんない。薄原、何でもイイから早く消して」

そんな風に苛立ちながら少しジタバタした後、ようやくジャージを羽織り、左の袖にも腕を通す馬淵。

放課後、この体育倉庫で聞いた話の通り、その背中に生えている翼は手の平くらいの、大したサイズじゃない。

だけど所詮、異物は異物。あつて困ることはあつても、なくて困ることはない。日常生活には支障をきたさず、人前で着替えもできない。

そして何よりその突起物は、走り高跳びの邪魔にしかない。上を目指す者の、足枷にしかない。

高く跳びたいという願いを　決して叶えてはくれない。

『たとえ翼が生えたところで、人間が飛べるわけがない。そういうのは幻想ファンタジーの中だけの話。そして結局、幻想は幻想ファンタジーファンタジーでしかないのさ。なのに翔子ちゃんしょうこは願った。だから中途半端に叶った。“僕ら”はそういう存在だからね』

願いから生まれ、願いを叶えない存在。

所詮、ペガサス“もどき”　か。

「……放課後と違ってさ、オレから一つだけ質問してもイイか？」  
ジャージによって隠れた白い翼を見ながら、オレが訊くと、  
「何でもどうぞ。それでこの邪魔な翼が消えるなら」

放課後と同じく、彼女は背中越しに答えた。

だからそのまま。

「それじゃ遠慮なく。馬淵、お前さ」  
無防備な女子の背中に 不可侵の聖域に、オレは“言葉の刃”  
を突き立てた。

「自分の母さんのこと、どう思ってる？」

その瞬間、オレは穢れなき白に呑み込まれた。

\* 結・続 \*

「アイツの両親、中学のとき離婚してた」

「ありやりや、それは可哀想に」

「で、父親の方に引き取られて、それ以来母親とは会ってないっか、会っちゃいけないみたいなんだけど、一回だけ手紙が来たらしいんだ」

「ほうほう、手紙が……。ちなみに内容は？」

「いや、さすがにそこまでは分からなかったけど、結城むすいが言うには『頑張ってますね』みたいな内容じゃないかって」

「『頑張ってますね』？」

「ちょうどその直前、大会で優勝した馬淵まぶちが大きく新聞に載ったんだけど、多分それを見た母親の手紙だろうって」

「なるほど。娘の元気な姿を見た母親の手紙、か……。もしかしてそれが翔子ちゃんしょうこの原動力だったりするのかい？」

「本人は、否定してるみたいだけどな。だけど誰がどう見ても、もう一度優勝して新聞に載るために 自分の姿を母親に見せるために、頑張ってるようにしか見えないうって結城が」

「なるほどなるほど、見えてきたよ。おそらく、翔子ちゃんにペガサスが宿ったのはその本心が原因だろうね」

「本心？」

「ああ、本心 本当の心の内。そういうのは往々にして口にも顔にも行動にも出せないものなんだよ、君のモノローグと違ってね」

「うるせえ、ほっとけ」

「だから誰にも打ち明けられないそれは、ストレスとなる。そしてさらに翔子ちゃんの場合、それに焦りと重圧というストレスもプラスされて、ますます本心の願いに依存して、だけど発散できないそれはまたストレスになって。そんなことを延々と繰り返した先でペ

ガサスが生まれた　　ってどこだろうね」

「……もしそれが原因なら、どういう対処法があるんだ？」

「そんなの簡単だよ。彼女のストレス発散に付き合っただけでいいのさ。そうすれば一時的にだけお願いの無限ループから解放してあげられる」

「ストレス発散に付き合っただけでいい。女性って何すればいいんだよ？」

「大丈夫、何も難しいことは必要ないよ。彼女の本心を　　誰にも打ち明けられなかったそれを、君がとことんまで聞いてあげればいいだけさ」

「聞いてあげるだけ……」

「ああその通り、聞いてあげるだけでいい。女性っていうのは大概お茶でもしながら愚痴を聞いてもらうのが大好きなんだよ。……まあ、そんな風に至極普通に　　穏便に済めばいいけどね」

どすん、という大砲みたいな轟音。

撃ち出された砲弾は、オレの身体。

だけど、砲門と呼ぶべき体育倉庫の出入り口　　スライド式の扉を、砲弾がブチ破ったことから、これはどう見ても暴発。

少なからず、オレにとっては暴発だ。事故以外の何ものでもない。……まあ、予測していた事故ではあるけど。

だから後ろ向きに吹き飛ばされたにも関わらず、オレは倒れることなくグラウンドを踏みしめ、土埃を巻き上げながら滑走し、そしてようやく勢いを殺しきった。

「全然穏便じゃねえな、この展開」

やっぱり準備してきて正解だったな、と思いながら自分の身体を見下ろす。

そこにはオシヤレ過ぎるほどにダメージを負った服と、その隙間から見える赤い傷口。

鋭利な『何か』による無数の切り傷。



「何で」

と、ゆっくりとした足取りで体育倉庫から出てくる馬淵。

その背中には、腕の長さほどに大きくなった純白の翼。

袖を通しただけのジャージは翼によってめくれ上がり、スポーツブラが丸出しの状態になってしまっている。なっってしまったが、そこから色気のようなものは一切感じないし、感じられない。

その姿から感じられるのは、天使のような神々しさ。

吸血鬼が最も苦手とする 聖域の力。

そしてゆっくりとした歩みのまま、オレと一緒に吹き飛ばした扉の手前で、彼女は立ち止まる。

「何であの人の話なんかするのよっ！」

馬淵が言った いや、吼えた。

その表情が怒りなのか驚きなのかは、オレには分からない。

しかし確かに分かるのは、それに反応するように背中が再び巨大化したこと。馬淵の身長を超えるほど、爆発的に大きくなったこと。

今まで溜め込んだストレスを爆発させるかのように。

「あの人のことなんて、私に訊かないでよ！」

「何でだよ？ 何でも訊いてイイっていったのはお前じゃねえか。

だから教えるよ、自分の母さんのことを」

「あんなの、母親なんかじゃないっ！」

自分を抱きしめるように、異物を払うように、馬淵が一度両翼を羽ばたかせた。

もちろんヴィアンの言う通り、そんなことをしても人間は飛べない。精神世界ならまだしも、現実世界では不可能な話だ。

だけど、その羽ばたきは風を生んだ。

無数の白刃と化した羽根を乗せた、一陣の疾風を。

「っ！」

とっさに身を縮め、オレは腕で急所を隠す。それだけの時間はいや、それだけの時間しかなかった。文字通りそれは風のように

速く、速過ぎると感じた頃には通り過ぎていた。

全身に痛みが走る。身構えたおかげで今回は吹き飛ばされなかったが、オレの服と皮膚はミキサ―に突っ込んだみたいに切り刻まれていた。

「あの人は」

馬淵が閉じた翼を広げる。

その動きは、風を起こすための予備動作。

そして、速過ぎる攻撃に対応できる唯一の時間。

「私を置いて出てった。捨てていったのよっ！」

翼が空気を叩くより一瞬早く、オレは真横に跳んだ。

それも、十メートル弱をたった一步の踏み切りで。吸血鬼“もどき”の血の力を全開で。

しかし。

翼より早く動いたところで、風より速く動けるわけではない。第一、風を躲そうなんて考え自体が甘かった。

影や、炎や、髪や、牙や、水よりも。

風は速く。そして、

攻撃範囲が広過ぎるっ！

そう理解できたのと同時に、オレは白い疾風に呑み込まれた。

しかも今度は体勢が悪い。躲そうと思っていたから防御はしてないし、身体は宙に浮いたまま。

結果、オレは疾風に吹き飛ばされ、白刃に切り刻まれ、全身を地面に強く打ち付けながら転がった。

「……やっぱり相性最悪だな」

そんなことを口に溜まった血と一緒に吐き出し、オレは一向に傷が治らない身体を立ち上がらせる。

聖域の攻撃力に対しての、闇の治癒力。

どっちが強いかなんてバカ日本代表でも分かる。実に分かりやすい話で、実に分かりきっていた話だ。

だって吸血鬼“もどき”の力が最低まで封じられた戦いを、オレ

は一度経験しているから。

「だけど あの時のおレとはもう違う。」

そして、アイツとペガサスも違う。

ペガサスの攻撃は、数は多いが威力は低い。到底致命傷にはなりそうにない、羽根のように軽くて薄い一撃だ。

「馬淵！」

随分と遠く離れてしまった彼女を真っ直ぐ見据え、その名を呼んだ。そして返事を待たず、

「お前、母さんから手紙もらって嬉しかったんじゃないのかよ!？」

オレは一直線に駆け出した。

「 そんなわけあるはずないっ！」

否定の言葉と共に、馬淵が羽ばたく。

白い疾風が飛んでくる。回避不能の白刃の群れが、  
だけど。

躲せないのなら、躲さなければいい。

覚悟さえ決めてしまえば簡単な話だ。ペガサスの力が尽きるのが先か、吸血鬼“もどき”の血が尽きるのが先かの我慢比べ。

だから、目前に迫る疾風に向かって走り続け、頭だけは両腕でガードして、オレはそのままの勢いで突っ込んだ。

足が止まる。風が壁のように立ち上がり、前に進めない。

「 だけど一瞬で通り過ぎていく壁は、一瞬しかオレを止めることができる。できない。」

オレも、止まる気はない。

小細工一つなく、ただ走る。

「 それがあったから、陸上頑張り続けてきたんじゃないのかよ!？」

「 違っっ！」

いくつもの壁に阻まれようとも。

「 頑張り続けられたんじゃないのかよ!？」

「 違っっ！」

どれだけの白刃に切り刻まれようとも。

「頑張り続けてるんじゃないかよ!？」

「違う、違う違う、違う違う違う違う　　違うっ!」  
たとえ相手の心に土足で踏み込むことになるうとも。

「お前の本心は　　」

バカみたいに真っ直ぐ足を進めて、

「母さんのことが好きじゃないかよ!？」

オレは、吼えた。

もう既に馬淵は目の前で、そんな風に声を張り上げる必要はなかったけど、そうしなきゃいけない気がした。

そうすれば、馬淵の本心に届くような気がした。

そして。

彼女の答えは　　否定の言葉ではなかった。

風のない穏やかな夜に、

「何で　　」

と、小さく零した。

「あの人は私を置いて出てったのに。捨てていったのに。勝手に手紙なんか送ってきて、今さら母親面してるのに。そんなあの人の自己満足なのに。どこまでも無責任で自分勝手な人なのに」

何で?　何で?　何で!?

「何で　　あの人を嫌いになれないの?」

と、涙を零した。

そして彼女は涙を追うようにその場に崩れ落ちて、泣き崩れた。  
はぐれた子どものように、わんわんと。

お母さんに会いたいよ、と泣き続けた。

「本心というのは実に厄介なものでね、当の本人すら制御できないことがあるんだよ。だから隠したつもりでも顔や行動に表れたり、それどころか真逆の行動取ってしまったたり。ほら、よくあるだろう。好きな子について意地悪してしまうなんてこと」

昼休み。津々浦第二高校。第一体育倉庫。

「爽やかに『ゴメン。待った?』くらい言ったらどうかと、オレは思うんだが」

「嫌よ。そんなバカみたいな台詞」

と、即断で却下する馬淵まいづち。そして続けて、

「そんな台詞を平気で言える人間なんて、バカなチビだけよ」

オレを見下げながら、鼻で笑った。

もちろんそれは身長の関係上仕方ないことで、馬淵に一切の悪意はないことは分かっている。

そして、オレが強く握りしめた拳に一切の殺意がないことも分かっている。

「……で、一体何の用だよ？ まだ調子悪かったりするのか？」

「いや、大丈夫。むしろ以前より身体が軽いくらい」

今なら空も飛べそうな気がするわ、と皮肉を言ってみる馬淵。

もちろん、その背中に翼はもう存在しない。

昨夜。あの後。

流れ出る涙に比例するように、白い翼はみるみる小さくなっていき、それが完全消滅するのと同時に馬淵は意識を失った。

トランス状態。

急激に“ヤツら”の力を解放すると、無意識の意識で行動し、前後最中の記憶が極めて曖昧になる。という話を、狼男戦の直後に

ヴィアンから聞いていた。

だから、オレたちは嘘を吐くことに決めた。

『一度でも“僕ら”に関わると、どうしたって引かれやすくない、惹かれやすくなる』

結城や魚住さんと違って、馬淵は知らなかったことにはできない。ただど覚えていないことなら、思い出せないようにすることはくらいはできる。曖昧な記憶に嘘の情報を上書きすることができる。

だから馬淵が気を失っている内に戦闘の痕跡を隠滅して（ズタズタになった服だけはどうしようもないのでヴィアンにコートを借りた）、目覚めた彼女に至極穏便な『お被い』で翼を消し去ったと伝えた。

そして今日。

下駄箱に入っていたメモで呼び出され、オレはこの体育倉庫に来ていた。一応、馬淵の体調の確認という意味もあつたけど、まあ、そっちは問題なさそうだな。

とても元気にオレをバカにしてくるし。

「じゃあ何の用だよ？ 早く戻って昼飯食いたいんだけど」

「それよ、それ。お昼ご飯のことよ」

と、手に持っていた赤チエツクの包みをオレに突き出す馬淵。

「今朝、自分とお父さんのお弁当作ったら予想外におかずが余っちゃってさ、どうせ捨てるんだったらアンタにあげようと思って。ほら、アンタってモテようと努力するけど全て逆効果で、土下座してまで女の子にお弁当を作ってもらおうとして警察に通報されるキャラ設定でしょ？」

「そんな複雑なキャラ設定で生まれた覚えはねえよ」

ウチの母さんも生んだ覚えはねえよ。

「ま、とりあえずありがたく恵まれときなさい」

そう言っただけで馬淵が押し付けてきた包みを、オレは反射的に受け取った。

「それじゃ、それだけ」

くるりと反転し、体育倉庫の扉を開く馬淵。しかしその足を前に進めることなく、

「あ。それともう一つ、アンタが女子に一生言われない台詞を恵んであげるわ」

やっぱり背中越しに、こう言った。

「ありがとね」

ちなみに後日談だが、数日後馬淵は学校を休んだ。結城曰く、遠くの誰かに会いに行ったらしい。

そしてこれは完全に余談だが、どんな些細なことでも文句を言ってやるうと、馬淵の弁当を食べたオレはまたしても完敗した。

やっぱりどうにも相性が悪いみたいだ。

第五話「vs. さみしいケルベロス」に続く。

**\*終\* (後書き)**

以上、もどきども第四話「vs. とべないペガサス」でした。

結局、何だかんだの紆余曲折で完結までひどく掛かってしまいました。しかもトータル二万字弱に五カ月も……スミマセン。

もし「何、寝てたの？ ハア!？」みたいなお言葉がありましたら、感想に書いて頂けるとありがたい限りです。あ、もちろん普通の感想も心よりお待ちしております。

ではでは、ここまで読んで下さった貴方に最大級の感謝を！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4607n/>

---

もどきども 第四話「vs.とべないペガサス」

2011年1月31日21時55分発行